



C.P.I. Mates

No.56

2002.9.25

The Committee for Promotion to Innovate Japanese People by Educational and Cultural Contact, since 1979

目次

里親—里子新聞で、教育里親と教育里子とのコミュニケーションを図ります

編集部員を募集します。

なぜ、この新聞の発行アイデアが出たのか？

事務局次長 山川洋一

ご自分の受持ち里子との文通で知っておいて戴きたいこと

交流委員長 推名陽子

地域会だより ***** 会報 53 号に続いてお送りします *****

茨城地域会から投稿（会長のコメントもついています）

世話役代表 人見 守

北海道地域会より投稿（同 上）

世話役代表 笹島 速

7月以降、11月初めまでの会議スケジュール

7月20日および9月8日（日） 理事会を行いました。概要を掲載します。

11月9日（土） 評議員会を行ないます。次の議案につき討議を行ないます。

- ① インドネシア/スリランカ両国での奨学生認証式に、地域会の代表を送る件
- ② スリランカ現地センターからの特別な寄附依頼について
- ③ 今8月に引き続き、来期に予定されている、スリランカでの「日本祭り」をC.P.I.とSLNECCとで行う件
- ④ 2002年度計画をブラッシュアップ
- ⑤ 里親—里子新聞についての、アイデアを出し合う

別冊特集 スリランカ卒業里子の調査レポート

教育里親と教育里子とのコミュニケーションを考えます

全国 会員各位

編集部員募集

里親＝里子新聞（仮称）を発行します。

お手伝いください。

文通による里親＝里子交流を行っていますが、文通がスムーズにいかない、あるいは、お互いに情報が不足しているとの声があります。理事会で2回に渡って討議し、まずは里子向けに「里親新聞」（仮称）を現地語版で発行することになりました。本年10～11月を初版の目処として、その後、四半期発行をしたいと考えています。

◎ お賛同頂ける方、ご質問のある方は、担当理事山川までご連絡下さい。

TEL & Fax: 043-278-8580 E-メール: YQLO0201@nifty.com

◎ 10月10日までにご連絡をお願いいたします。

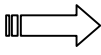
里親新聞の主な内容

- ① B4版の両面2枚（B5で8ページ）が原案です。4半期発行が目標です。
- ② 本部目黒事務所に編集部を置き、有志で編集部を構成していただこうと思います。
- ③ 経費は本部広報予算で、としますが、印刷方法など工夫していきたいものです。
- ④ 「里親さんを代表してのメッセージ」を、毎回MLにて投稿を募集して載せます。
- ⑤ 地域会からの通信を柱として、日本各地の情報を年2回送れるようにします。
各地の特徴など少しずつでも日本のことを知らせたいと思います。
1回の新聞で、10地域からの写真入り通信を掲載したいと考えています。
- ⑥ 日本の文化、自然などについての紹介も考えています。

お願い

- ◎ 地域会委員；全国の協議会、地域会の中に委員を一名置いてください。
編集部から、記事を依頼します。
- ◎ 本部編集委員；首都圏でC.P.I.目黒事務所にお越し願える方、編集をお手伝い下さい。日本語原稿の手配や編集をお手伝い下さいますと助かります。

（現地語への翻訳は、在日留学生やJICA海外青年協力隊出身の方たち等に、ボランティアをお願いすることになりました。数人のお申し出をいただいています。）

なぜ、この新聞の発行アイデアが出たのか   次のページに

なお、現地では、日本語版の里親向け「里子新聞」（仮称）を計画してもらいます。

1.文通の実態

(里親側) 文通によるコミュニケーションの重要性を理解ししつつも手紙を書いていない会員が多い

- ① 忙しくて手紙を書く時間が無い人
 - ② 手紙を書くのが苦手な人
 - ③ 手紙を書くのに面倒に思う人
 - ④ マンネリになって、書くことが無い
 - ⑤ 手紙を書く義務が苦痛になって退会する会員もいる
 - ⑥ 「里子の手紙が形式的になっている」と不満を持つ会員がいる
- 一方、里子からの情報が少ないと「不満」を持つ会員もいる。

(里子側) 里子の意識調査は不十分だが、「自分が手紙を出しても里親から手紙がこない」と不満を持つ子がいる

- ① “手紙がこない” 寂しく思う
- ② 里子は日本のことを知らない
- ③ 個別の里親への感覚が薄らいでいる子が出てきている

(双方) よく手紙を書く子は「返事が来ない」と不満を持つ。

逆のケースは里親が不満を持つ

2.課題 : 相互文通は「C.P.I.の教育協力を肌で感じあえる手段」であるにも関わらず、

- ① 日本語で文通できない(翻訳に出すのを嫌う方もおられる)
- ② 返信までに3ヶ月以上掛かる(主として相手国内の翻訳の問題)
- ③ 文通の新鮮味が薄れている

などから、停滞しているように思われる。

受持ち里子との文通 ⇨ 次頁

3.対策 (1): 日本語と現地語で文通が出来る体制を作れないか

- ① 日本⇒里子たちの国の言葉での翻訳(多数だと日本の協力者に無理)
- ② 里子⇒日本への日本語での翻訳(現地の大学・日本語科の先生たちに協力を依頼することで、可能と思われる。謝礼を決める必要がある)

(2): 里親新聞、里子新聞(仮題)でコミュニケーションを図る

- ① 日本から相手国へ、相手国語で新聞を出す。
在日留学生・JICA 海外青年協力隊 OB/OG の協力者を募集する。
- ② 相手国から日本へ、日本語で新聞を出す((1)-②の協力で)。
- ③ メッセージ・地域の様子・文化などを平易に知らせ合う
- ④ 直接的に文通がなくても、双方の情報を知りうる
- ⑤ 文通ができていない人たちへのフォローアップにもなる

ご自分の受持ち里子に手紙を出すときに、知っておいていただきたいこと

会 長 小西菊文
交流委員長 推名陽子

「『里親一里子新聞』を出すなら、自分の受持ち里子との文通はどうなるの？」と、ご質問がありそうですので、「文通の仕方」について、おさらいをしたいと思います。

『一人を通して、考えていく活動』

C.P.I.は、『文通をするための会』ではありません。小西会長の話しでは、当初「『ひとりの里子を通して相手国を知ろうとし、また日本と日本人を考えていく活動』を追求したとき、文通というアイデアが生まれた」ということです。

教育里親活動に参加した私たちは、教育里子—教育里親が互いにどんどん自分のことや国のことを知らせ合えるだろうと思い、「子どもからは特に試験の成績や将来の希望する仕事を自分の言葉で報告して欲しい」と期待していました。しかし、これまでの経験の中で、そのような手紙を書いてくるケースは稀なこと、と悟るようになりました。大学を出ても先端技術系以外には希望する職種につける可能性は低いわけですから、それはそれで止むを得ないことかもしれません。（日本の生徒でも、きっと書けないでしょうね。）

ですから今では、C.P.I.本部が、教育里子の調査に基づいて状況報告を毎年お送りするようにしているわけです。

また、手紙を書くことが少ない里親さんも多いことが分かってきましたから、文通そのものについても、「会員の権利義務に関する規則」第8条で、『会員は文通をすることができる』としたわけです。これはつまり、「里親からの手紙は義務ではありませんよ。でも、本部は文通の円滑化をお手伝いしますよ」との立場を、ルールとして明文化したということです。（スリランカ現地本部は、規律のひとつとして教育里親への文通を促えています。インドネシア現地本部は、自主性にまかせる方針をとっています。）

文通は本部を通すのが原則です

C.P.I.では、文通の円滑化のひとつとして、〈本部を通す〉ということをお原則としています。その理由を挙げてみます。

- ① 里子との文通がどれだけ行われているか本部で把握する必要がある。
- ② 直接の文通をした場合、現地と日本とは郵便事情が違うので必ず着く保障がない。そのため後で責任問題が発生しても本部で対処できない。（本部扱いの場合、調査等対処ができる。）

「里子の手紙の内容をチェックするためでは？」と言われる方がおられますが、決してそういう意味ではないことをお解かり戴きたいと思います。郵便事情が日本とは違い、宅配が行われる地域が限られていますから、直接日本から送ると、過去、紛失あるいは奪取の事件が後を絶ちませんでした。「円滑化」の意味の最も大きなことは、このようなことを防ぐことにあります。

里子に手紙を直接送りたい方へ

それでも、里親さんの中には、里子の手紙は本部を通した場合、書いてから届くまでの間隔があくと言われる方がおられます。

確かに、日本からは月に一度（月末）しか送りませんし、相手側からは英語への翻訳分が出来上がるのを待って送る傾向にありますから、それはそのとおりです。

「だから、双方とも英語でのやりとりができるので、直接の手紙を出したい」という方がいらっしゃるの理解できます。実際に、子どもからもそのように要望されて、住所を教えてください、直接の文通

をしている方もおられますから。
ただし、未着などがあっても、ご自分の責任としてやってほしいのです。
そしてその方法で文通する場合は、本部に連絡していただくようお願いします。
里親里子間の文通数を把握するためです。

返信用切手について

次に、本部を通して手紙を出す際には、里子からの返信をお送りするための80円郵便切手を同封してください。実際には、当初考えていた、日本国内での里子の手紙送料を里親さんに負担して頂くという考えは“画餅”となっています。里子からの手紙が80%を超えているのに比べ、里親からは10%強とアンバランスだからです。日本からの手紙を送ってくださる方には、少しでも本部経費への圧迫を減らすことにご協力をお願いしているわけです。

翻訳協力金について

また、翻訳を本部に依頼するとき（英文の時は不要）は、1000円を同封してください。他の団体の中には、会費に翻訳料を含めているところもありますが、それですと翻訳の要否・回数などで不公平が生じます。C.P.I.では必要な度に頂くようにしています。

Photo 勉強している少女

Student(1).jpg

夜、小さなランプで勉強している少女。
どんな文章よりも、強く訴えるものがあります。
里子が描いたこの絵は、あちらこちらの展示会で「生活がよくわかる」と評判です。

Q：里子への手紙に同封できるものは？

A：写真・絵葉書・絵・畳んだお人形などです。切手・現金・小切手などを贈ることは、あらゆる面からみてよくありません。

Q：里子からの手紙は必ずくる？

A：スリランカの場合、里子たちは地域センターに集まり強制的に手紙を書かせていました。最近は家で書いて持ってくるという形になっているそうです。どうしても書いてこない子もいるそうです。

子供の中には学業は優秀でも手紙が苦手という子、家庭の事情等で期日までに書けない子供もいるので、規律としては少し緩やかにしたということです。だから手紙が来ない里親さんもいるということになります。たまたまそういう子供を受け持っておられるの里親さんは、暖かく見てあげてほしいと思います。（もちろんなるべく書かせるように努力はしているということです）

Q：里子を変更することは、できる？

A：どうしても、よく手紙を書く子どもを教育里子にしたいとお望みの方には、里子変更を行っております。

地域会だより C.P.I.茨城地域会の歩み

世話役代表 人見 守

私たち茨城地域会は、会員が50名ほどの地域会です。過去10年余りを振り返ってみて、何ら特別のことをしたという思いはありません。ただ、最初に集まったときに、地域ごとに手紙を翻訳するようにしたいというC.P.I.の方針を聞かされて一度集ったことが、三ヶ月ごとに集まることに発展し、現在までそれを続けたに過ぎません。

集まりを重ねるうちにいろいろ提案が出て、翻訳会は「交流会」、三ヶ月毎の通知は「CPI 茨城ニュース」、と形を変えていったわけです。そしてさらに、5月につくば市で開かれる『国際交流フェア』のテント村への参加、10月に行なわれる県の『国際交流月間』への参加、というように活動の幅が広がってきたのです。年4回毎年集まりを続けたことがよかったのだというのが会員の感想です。1995年5月に第一号を発行した「C.P.I. 茨城ニュース」も、8月で31号になりました。

発足当初のこと

1990年10月21日、小西会長の呼びかけで茨城の里親13名が水戸市に集まり、「茨城ブロック」を作ったのが始まりでした。その年は、私が、5月5日付けの朝日新聞の社会面に大きく掲載されたC.P.I.の教育里親活動の記事を見て、会員になった年でした。

「今日来た人が、みんな地域の世話人になってくださると助かるのですが」という小西さんの声で何となく全員が世話人となり、その春に退職して暇だった私が、世話人代表にさせられました。

翻訳会のはじまりから交流会へ

里子への手紙の翻訳はブロックごとという小西さんのアドバイスで、その年の12月9日つくば市の春日公民館で第1回の翻訳会を開きました。

小西会長コメント：里子との間の文通で、日本語と英語の間の翻訳が必要な方のために、翻訳協力してくださる方は欠かせません。

本部に協力者はいます。

でも、書いた人の息吹を伝えるには、書いた方と翻訳者が相談しながらするのが、いちばんいいです。そういう組織を地域ブロックごとに欲しいと思います。

当日は里親9名、その家族4名、インドネシアの留学生8名、計21名の参加でした。留学生の一人は東京からの参加で、小西さんとインドネシア留学生協会との話し合いで協力関係ができていたようでした。こうして始めた翻訳会は、その後『交流会』と名前を替え、留学生との交流をしながら、毎回楽しい集まりになっていきました。

Photo 茨城（1）

翌年にはスリランカの留学生も参加し、両国の留学生とのよいムードが生まれました。

それから、留学生が開催する『インドネシア・ナイト』に入場券を購入して参加し、留学生協会への協力もしました。

翻訳会の後スリランカの留学生宅に招待されてスリランカ料理をいただくこともあり、思いがけない楽しみも得られました。

あるときは、小学校に毎年残るピアノをスリランカに送ろうという提案で、里子訪問をする九州の会員の方々にお願いして運んでいただいたこともありました。

小西会長コメント:ピアノは現地センターのブラスバンドで活躍しています。

また、インドネシアからの研修団を、水海道の『あすなろの里』に迎えての交流もしました。これも楽しい体験でした。

小西会長コメント:インドネシアの奨学生を世話して下さっているボランティアリーダーを、茨城の方々に受入れて戴きました。

国際交流フェア

1997年5月、つくば市で「国際交流フェア」が毎年行なわれていることを聞き、テント村に初めて参加しました。

第一回目は、C.P.I.の資料や里子の手紙、里子訪問のアルバム等の展示、里親募集のチラシ配布などしました。

しかしそのときは、残念ながら、他のテントでの盛んな食べ物販売に押されて、余り盛り上がりませんでした。

翌年からは、前年の経験を生かして、セイロンティの無料サービスと販売を行なったので、テントに入るお客さんも多く、里子の手紙やアルバムを見て戴きながら、C.P.I.のPRができるようになりました。「国際交流フェア」も本年度で連続7回目ですが、参加希望団体が多い中で参加が認められました。

いばらき国際交流月間のこと

もうひとつ、毎年10月の「いばらき国際交流月間」のことをお知らせします。私どもは、この機会を利用しようと考えて、11月に行なっていた交流会を1ヶ月繰り上げ、このイベントへの参加に切り替えました。

最初は2000年で、「アジアの教育支援フォーラム」として、スリランカとインドネシアの留学生に小西会長を加えて、フォーラムを行ないました。

小西会長コメント:一般の方々に、『国際協力とは?』を考えて戴ける機会をつくることができましたと思います。

Photo 茨城(2)

翌2001年は、「スリランカ料理とインドネシア料理を作ろう会」(前ページ写真)を行ない、好評でした。今年は「スリランカ・クッキング」を予定していません。

私どもは忙しい人が多いので、会合を一度で済ませられるように計画してきました。

意見交換が足りないところは、電話・FAX・email等で間に合わせました。

こうした、ささやかな活動があったからでしょうか。去って行く会員の穴を埋めるように新会員が加わり、50名前後を保持しています。改めて、活動を続けてよかったと思っております。

1. 地域会の成り立ち

1989年に、「地域会らしきものを立ちあげなければ」ということで、世話役代表1名・事務局2名でスタートで、「当時は、会報もB5版のものを年3～4回出すのが、やっとだった」との初代代表のお話です。

1999年10月の『スリランカからの演劇キャラバン受け入れ』をきっかけに集められた有志を中心に、その翌年3月頃、代表1名・副代表2名・事務局3名を中心に9名で現在の世話役会が構成されました。

その数ヶ月を振り返ってみますと、「キャラバン受け入れのための、実行委員会」の立ち上げを全道の会員に呼びかける、「北海道会報第1号」を発行し、順を追って準備状況をお知らせした結果、期間中（6日間）に延べ40名の会員の力を結集することが出来ました。そのことに力を得て、以来この態勢を維持してきました。

2. 地域会活動のご紹介

- ① 会員さんへの広報活動として、会報の定期発行⇒ 2001年度6回
2002年度（計画）4回
- ② C.P.I.の啓蒙と新規会員獲得活動⇒ イベントへの参加（国際交流フェスタ他）
- ③ 地域会独自のパンフレット作成
- ④ 会員募集ポスターの掲示（公共施設ショッピングセンター）
- ⑤ 会員さん同士の交流会⇒
年次総会、新年会、スタディツアー
報告会、留学生を交えての交流会、
地域懇話会

このような活動の中から 2001 年度の地域懇話会とイベントのご紹介をします。

まさに地域会！（三石地域懇話会）

Photo 北海道（1）

会員さんの中には思わぬ経験をお持ちの方が居られます。

太平洋戦争時代にインドネシアへ従軍され、戦後はインドネシア独立軍の指導をされた方が三石にお住まいでした（ミツイシと読みます。有名な襟裳岬の近く。北海道の人間でも、通り過ぎることはあっても泊まることのない地区ですが、食べ物が美味しい）。そこで、来ていただける方に三石にお集まり戴くことにして、「地域会勉強会」を開きました。勉強会と銘うっても、太平洋を目の前にした小さな町営温泉での「1泊研修して呑みあかす会（?）」が主たる狙い！！

度重なる死線を超えながらのインドネシアの人たちとの交流、その後の生きて帰られた戦友やインドネシアの人たちとの交流など、私たちの今の活動やこれからのことを考える上で貴重なお話を、伺うことが出来ました。参加して下さった方が10名。地域会員の総数は40名ですから、初めての取り組みとしては大成功といってよいと思います。

北海道国際協力フェスタへの参加

2000年に始められたこのフェスタへの参加にあたって、会報で全会員へ呼びかけ、「実行委員会」をつくりました。毎回協力者も増え、昨年度は2日間で延べ20名程の方が参加して下さいました。

写真は「ファッションショー」の様子です。各参加団体が、それぞれ関係する国の衣装を着けてのショーなのですが、私たちはスタディツアーのときに購入してきた（このショーに…と揃えたものです）衣装を着けて参加しています。これが思わぬ成果をあげています。

Photo 北海道（2）

まず、「着付けを手伝ってくださあい」。会員さんは現地で直伝の技を覚えてきていますので、他の団体の若い人たちの着付けまで頼まれます。それでも手が回らず、留学生の奥さんも借り出され、そこでちょっとした文化交流が行われたりもします。

さらに「ちょっとサリーを着てみたいんですが…」。皆さん着せてもらおうと大喜びでブース会場の中を歩き回るやら、写真を取り合うやら。そんなことがネットワークづくりにひと役を担っています。C.P.I.北海道は、今では「ファッションショーには欠くことのできない存在」！！いや、国際協力フェスタに欠くことのできない存在になってきております。

小西会長のコメント： 代表さんも四代目となり、地域会事務局の皆様の創意工夫には、いつも感服します。

3. 地域会活動における課題と対策

新規会員の入会もありますが、退会の方もおられるため、会員増が進まない。

《現在行なっている対策》

新規会員には、「ようこそ北海道地域会へ」という挨拶状とともに、過去の会報や地域会パンフを同封して送るとりくみを始めました。



札幌以外でのイベント情報の入手ができず、札幌中心の活動になっている。

《現在行っている対策》

会報で、情報があればすぐに事務局宛に知らせてほしい旨呼びかけています。

イベントの実行委員(協力者)の顔ぶれが毎回ほぼ同じ。協力者が拡大しない。

《現在行っている対策》

会員同士の横のつながりを大切にしながら、機会あるごとにイベントへの出席を要請、参加することの楽しさを味わってもらおうようにしています。



事務局だより

7月20日、9月8日に、理事会を行いました。概要をお知らせします。

7月20日 第1号議案 総会で理事会一任に付された、会員名簿に関わる規則の条文文言検討。継続案件とする。

第2号議案 同じく、事務局・事務管理部に係る細則検討。承認。

第3号議案 スリランカから提案のあった「日本スリランカ国交50周年を機会とした「相互交流プログラム」について検討。

6月に提案されたが、会員のコンセンサスをとる日程が間に合わない。従って、今回は『平和メッセージの展示』『ペン習字・スピーチコンテスト審査』のみに協力し、展示の大部分を日本スリランカ文化協会（大阪・神谷会長）と、当会有志の協力をお願いする旨を現地に連絡することになった。

第4号議案 今年度の計画フレームワークの推進方針を検討

9月8日 第1号議案 役員メール網で協議していた『里親一里子新聞』について協議

第2号議案 東京の活性化（特に、西部地域を除いたところに係る）を検討

第3号議案 スリランカからの2点の依頼ごとを検討。

1. スリランカセンター脇の大きな池を含む土地を政府から戴いたとのこと。「植物園をつくりたい。C.P.I.教育開発基金を100万円ほど使用したい」と申し入れあり。

現地側は「有用な薬草等の知識が都市部では減ってきており、教育として非常に有効」と言う。現地を見ている小西・山川・宮原の代表3名の考えをもとに討議。

理事会の決議は、次のとおり。

『薬草は自然の中で育つもので、人為的に管理するのは大変難しい。日本でも、スリランカでも、大きな植物園で枯れている薬草園を沢山見てきた。この際、教育的見地から、資金を出して専門家が造園するのではなく、薬草・花などを栽培する「里子たちの園芸グループ」を専門家の指導で造ることを提案したい。栽培に失敗しても、コッテで育つか育たないかを研究することこそが、雨量・土壌・肥料その他に係る『教育』となると考える。そのように計画を組むことができるなら、種・苗・専門家謝礼などの費用については、予算を出してもらいたい。』

2. かねてから現地側が本部センターの向こうに作りたいと言っていた、宿泊兼相談室機能を備えた三階建ての施設が、もはや半分立ち上がっている。

すでに200万円の寄付が個人的にされているが、C.P.I.で400万円を集めて欲しいと依頼があった。

問題は、現地側に、この施設を日本人の関係者用ゲストハウスとしたい意向が強いことである。

現地を視察した小西・山川・宮原の代表3名は、現地の地域センター社会活動者とくに女性の使用、および日本から長期滞在で行くボランティアの使用（特に女性）の使用を優先するべきだとの小西の意見に賛意を唱え、協議してきた。

理事会決議：『本施設の用途を、スリランカの社会向上に努力する者、とくに地域センターの社会活動家なかでも女性の宿泊・研修会議場所とすることを提案する。建設に係る寄付者が、上記活動家に優先して使用することには、絶対に反対する。ただし、日本側の協力団体が派遣する長期ボランティアの宿泊については、長期宿泊を考慮して頂けるよう、要請したい。この申し入れに対するご返答により、C.P.I.は、建設に係る助成受入れの行動を討議する。

（後日評議員会にも諮問します）

第4号5号議案 教育里親運動への賛同者を増やす計画で進めている、いくつかの案件につき、進捗状況を討議した。

第6号議案 里親交流団に係る反省および検討

11月9日（土） 評議員会を行ないます

場 所 東京代々木・国立オリンピック記念青少年総合センター

時 間 13：00～17：00 議事／
17：30～19：30 懇親会（会費2000円）

第1号議案 来期のスリランカ／インドネシア両国での奨学生認証式に、地域会の代表を送る件。
スリランカ 2003年1月、インドネシア 同年10月。

第2号議案 スリランカ現地センターからの特別な寄附依頼について。

9月8日の理事会決議に現地側が応えてきたときの対応を協議したい。

第3号議案 来期に、スリランカでの「日本祭り」2回目への参画について協議したい。

今年は、展示として『平和メッセージ』『自然の美しさ』『伝統文化』が行われ、コンテストは『日本語スピーチ』『書き取り』『書道』、講習は『折り紙』『書道』『生け花』が行われた。展示の多くは、日本スリランカ文化協会のご努力による。コンテストは、スリランカ全国の地域センターからの選抜および他の団体からも参加し、大変実り大きいものであった。

場所は C.P.I.の資金で2000年に竣工した多目的ホールが使われ、運営はボランティアの手と地元寄付および寄贈により行われた。

C.P.I.としては、来年は違う味付けで日本を紹介したい。

地域会単位でアイデアを募り、地方自治体への「国際交流助成」を受けて『C.P.I.地域会連合』のような形で参画したいと考えている。皆様のよいアイデアをお待ちしたいと思います。

第4号議案 2002年度計画の進捗について報告、質疑応答など。